

●種苗放流予定地の現況

潜水調査、水中監視カメラ調査によると、音響給餌ブイ周辺には大型で魚食性のヒラアジ類や、ハマフエフキの大型魚が周年みられ、冬季にはイカ類（アオリイカ、コブシメ）の出現もみられた。また、水中監視カメラで撮影された映像からは大型のヒラアジ類（ロウニンアジ、カスミアジ）やヤッコエイが魚礁に蝕集している小型のフエダイ類を襲う行動もみられた。このことから、当海域には放流魚を食害する可能性のある魚類が少なくないことが確認された。

（参考） 水中監視カメラによる魚類調査結果
（C・E） オニギリモツクモサメの出現状況の調査

2) 天然魚蝕集状況調査

① 蝕集魚種

蝕集魚については水中監視カメラ調査、潜水調査、漁獲試験結果を総合し、蝕集魚種、確認方法、現存量、出現頻度、配合飼料摂餌状況及び主な出現位置について表-14に示した。この結果音響給餌ブイに蝕集した魚類は123種以上が確認され、このうち潜水調査で34種以上漁獲調査で50種、水中監視カメラでは90種以上が確認された。このように調査方法により確認できた魚種は異なったが、潜水調査では蝕集魚全体を見ることが可能で、魚種の査定も可能で、蝕集範囲、その時点での蝕集魚種を見るのには有効であったが、調査時間、回数が少ないと、潜水により逃避、逸散する魚種があることで、全体の魚種組成、蝕集魚数は十分把握できないと思われた。漁獲試験では魚種の査定は確実にできるが、漁獲できない魚種があり、魚種組成の把握には不十分で、蝕集魚数の把握は不可能であった。今回初の試みとして使用した、水中監視カメラについては蝕集魚全体の撮影できない欠点はあるが、本海域のような透明度の高い海域では水平的にはかなり広範囲（20～25m）を撮影でき、水産上重要な大型種であれば魚種の査定も可能であった。また、長期間連続的な観察ができるので、潜水調査、漁獲調査に比較すると蝕集魚組成、蝕集魚数の調査には有効であった。ただ、表-7をみるとわかるように故障も多く、放流魚の追跡調査においては十分使用できなかった。

蝕集魚種についてみると常時出現し数が多かったものは水産上有用種ではハマフエフキ、ヨスジフエダイ、メイチダイ類、モンツキアカヒメジ、タカサゴ類、クロハギでその他小型のハナダイ類、ハタタテダイ類、スズメダイ類やツバメウオ類が多かった。これらの主要種のうちヨスジフエダイ、ハナダイ類、スズメダイ類は主に魚礁近く出現したが、他は比較的広域に出現した。また、周辺海域には普通にみられるベラ類、ブダイ類は音響給餌ブイ周辺には少なかった。

音響給餌ブイから給餌される配合飼料の摂餌状況についての詳細は後述するが、すべての魚種を調査できなかったものの多くの魚種でその摂餌が確認できた。

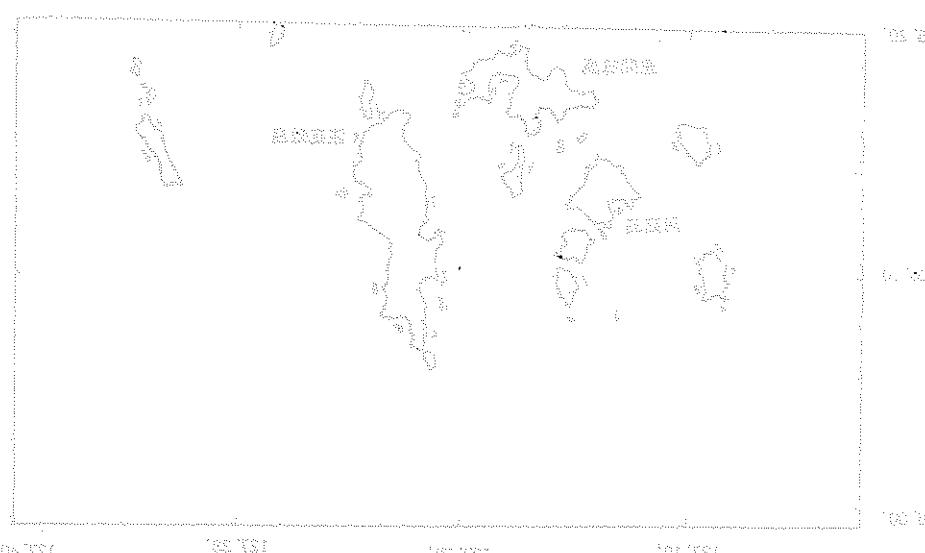


図-14 人工礁の位置と調査ルート

表-14 音響給餌ブイに虜集した魚類(1)

出現位置	主な出現位置	配合餌	出現頻度	現存量	確認方法	種類	出漁現山魚
周辺海底	D	×	○○	+	漁	ノコギ・リザ'イ科	
周辺海底	B	×	○○	+	漁	アカエイ科	
周辺海底	B	?	△△	+	漁	ウツボ'科	
周辺海底	B	?	△△	+	漁	エソ'科	
周辺海底	B	?	△△	+	漁	ヘラヤガ'ラ科	
周辺海底	B	?	△△	+	漁	ヤガ'ラ科	
周辺海底	B	?	△△	+	漁	マツカサウオ'科	
周辺海底	B	?	△△	+	漁	ハタ'科	
底層	B	?	△△	+	漁	アジ'科	
底層	B	?	△△	+	漁	キントキタ'イ科	
底層	B	?	△△	+	漁	テングクタ'イ科	
底層	C	?	△△	+	漁	キツネアマグ'イ科	
底層	B	?	△△	+	漁	ヒメジ'科	
底層	B	?	△△	+	漁	イスズミ'科	
底層	B	?	△△	+	漁	フェタ'イ科	
底層	B	?	△△	+	漁	フエフキタ'イ科	
底層	B	?	△△	+	漁	スタ'レタ'イ科	
魚礁 C	魚礁 C	○○	○○	○○	○○	○○	○○

表-14 音響給餌ブイに寄せた魚類(2)